

<書評>

## 加藤 公明・椋澤 和夫・若杉 温 編『考える歴史の授業』（上・下）

大野 智 史\*

本書は「生徒が主体的に歴史を考え、調べ、話し合い活動や討論など意見交流をし、各自がそれぞれに自分の歴史認識を発達させ、歴史を科学的に探究する姿勢や意欲、能力を獲得していく授業」と定義される「考える歴史の授業」の実践報告集である。長年千葉県歴史教育者協議会の中心として活動し、数多くの実践授業を生み出した加藤公明・椋澤和夫・若杉温が編者となり、編者含めて44名の教師による58本の実践報告と、編者による「考える歴史の授業」の教材論や方法論を紹介している。

本書でまず注目すべきは、実践授業の種類の豊富さである。小学校から教員養成を目的とした大学まで多種多様な校種における実践授業が紹介されており、授業に参加した生徒の学力や抱える課題も様々であるように見える。これは、「考える歴史の授業」がいかなる学校においても実践できる可能性があることを示しているといえよう。

また、私が実践報告集としての魅力を感じたのは、多くの教師が「変だなあ」探しや討論など、加藤実践で用いられてきた方法を授業に導入しつつも、校種や生徒の実態に合わせて各々の教師が授業方法にアレンジを加え、自分なりの「考える歴史の授業」を生み出している点である。例えば、歴史の解釈について討論を行わせた後の授業のまとめ方に関して、最も説得力がある意見を投票によって選ばせる方法、オープンエンドで終わらせる方法、教師が考えを伝える方法、他の生徒の意見をふまえた上での感想を記述させる方法など、教師によって異なる授業方法が用いられている。この中の投票について分析してみると、投票は説得力のある意見を考える能力を身につけさせるために有効な方法である一方、生徒は歴史を深く考察すればするほど、複雑な因果関係が絡み合っただけで歴史が形作られていること、歴史を学ぶ者のスタンスによって異なる解釈が成り立つことに気付くため、授業内での投票で解釈の優劣を決定すること違和感を持つと考えられる。このように授業方法はその特性によってそれぞれ長所、短所を持つため、教師がその都度柔軟に授業方法を選択すべきである。「アクティブ・ラーニング」ブームの際には数多くの授業方法が紹介されたが、「グループワークは〇人で実施すべき」など、模範となる「型」を細かく設定しているため、特に学校

によって生徒の学力や抱える課題、興味・関心が異なる高等学校には広がりにくい（成功しにくい）と思われるものが多かった。「考える歴史の授業」を実践したいと考える教師は本書を通読することで、自らが授業を行う学校や生徒に合った方法を見つけることができるだろう。

しかし、あえて実践報告集としての課題を挙げるなら、社会史や民衆史分野の実践授業が豊富な一方、やや政治史や思想史分野の実践授業が少ない点である。そのため集合体としての「人々」や「農民」、「労働者」の考えや行動について生徒に考察させる授業は多いものの、一人一人の人間が持つ理念や利害、人間関係、感情などに着目して歴史を考察させる授業が少ないように感じる。

続いて、本書における「考える歴史の授業」の定義に注目してみたい。この定義は、「主体的・対話的で深い学び」（「アクティブ・ラーニング」）と対応しており、編者が加藤実践など歴史教育者協議会の会員が長年積み重ねてきた実践授業と、「主体的・対話的で深い学び」との接続を試みているように見える。「アクティブ・ラーニング」の歴史を振り返ると、2014年以来初等・中等教育においても「アクティブ・ラーニング」がブームになったものの、グループ学習やペアワークを取り入れただけで生徒に授業内容を深めさせることのない授業が蔓延し、ついには文部科学省が「アクティブ・ラーニング」を「主体的・対話的で深い学び」と名称を変更して再定義したことは記憶に新しい。こうした事態を引き起こした要因の一つに、「言語学習」を始めとして、それまでに生み出された数多くの生徒主体的な実践授業の土台の上に「アクティブ・ラーニング」型授業を構築しようとする視点の乏しさがあったのは間違いない。本書の試みによって、戦後歴史教育における代表的実践である加藤実践が「主体的・対話的で深い学び」という形で定着することで、加藤らが長年重視した「平和で民主的な社会の担い手を育てる」という理念に基づいた「主体的・対話的で深い学び」が増え、「社会（産業界）の求める人材」の育成を目指しがちであった「主体的・対話的で深い学び」からの脱却が果たされることに期待したい。

最後に、今後の「考える歴史の授業」の研究に期待

\*茨城県立守谷高等学校

したいこととして、教材研究の深化を挙げたい。私は個人的に、加藤実践の最大の魅力は「加曾利の犬」に代表されるような、生徒の興味・関心を強く引きつけるとともに、考察を深めることで時代像を構築できる教材が登場する点であると考えている。若杉が指摘するように、近年の歴史教育では方法論が重視される一方、「何を教えるか」が軽視される傾向にあり、教材研究を深めていない授業もしばしば見受けられる。本書においても、テレビ番組を教材として使う授業が多い

点は少々気になった。教師自身が博物館を利用したり、地域に残る史跡を調査するなどして、こだわりの教材を見つけ出す作業は、教師自身の「歴史をみる眼」を養うことに繋がる。どのような教材研究を行えば、より優れた教材を発見し、効果的に生徒に提示することができるのか。歴史教育は今、教材研究の方法を考え、共有する時期に来ているのではないだろうか。  
上巻（地歴社、2019年8月刊、240ページ、2,300円+税）  
下巻（地歴社、2019年8月刊、256ページ、2,300円+税）